

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察

佐々木大樹

一、問題の所在

『陀羅尼集經』とは、翻訳序・目録等の資料に依れば、中インド出身の阿地瞿多 (Aṭṭhaka 無極高) が、六五三年から翌年にかけて「金剛大道場經大明呪藏分」の少分を翻訳したものと記されている。『陀羅尼集經』に関する研究は限られたものであるが、その成立に関して諸研究者の多くは中国撰述説を支持している。しかし頼富本宏先生が指摘するように、内容的にインド的要素が色濃いのも事実である。⁽¹⁾ 本經が翻訳された年次は、『大日經』・『金剛頂經』の伝来前夜であり、その内容や構成において、例えば灌頂儀礼等のように純密に通じる記事も見受けられる。『陀羅尼集經』の成立および資料的な位置付けを確定することは、同時に『大日經』等の成立問題にまで展開する可能性を秘めていると筆者は考える。

このような問題意識から研究の第一歩として、『陀羅尼集經』巻四所収の「十一面觀音經」と、巻十所収の「功德天法」の梵・藏・漢にわたる異訳対照を試み三つの傾向を看取することができた。⁽²⁾

(1) 先行する異訳經典との訳語の一致

(2) 主要術語における一貫した改変（強調点の移行）

(3) 儀軌・実践部分の増広

そしてこれら三つの傾向より、各々別個としてあった「経説」と「儀軌」を阿地瞿多が編訳したのではないかとの結論に到った。これらの傾向および仮説をより確実なものとするため、本稿では『陀羅尼集経』巻一所収「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」の特に経説部分を中心に異訳対照を試みるのである。

そしてこの「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」の異訳としては、『大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切呪王陀羅尼経大威徳最勝金輪三昧呪品第一（*以下、『大仏頂別行法』と省略す）』を見つけたことができた。この『大仏頂別行法』については書誌的に不詳な部分が多いが、幸にも異訳・関連資料として、また『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経（以下、『首楞嚴経』と省略す）』および『大仏頂広聚陀羅尼経』を発見することができたため資料とした。以下、これらの資料がどのように『陀羅尼集経』巻一「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」と対応してくるのかを明らかにしていきたい。

二、『陀羅尼集経』巻一所収「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」について

『陀羅尼集経』巻一に収められる「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」は、釈迦仏頂より示現する帝殊羅施、およびこの帝殊羅施を超える金輪の威徳を主題とすることから仏頂系経軌として区分される。

釈尊の滅後、仏のイメージは次第に普遍化・超人化されていくが、そのような流れの中でその身体的特徴として三十二相・八十種相好という概念が生成されていく。そしてその三十二相中の一つに「頂成肉髻相（*uṣṇīṣa-sīraskatā*）」の名つまり仏頂相が挙げられる。この仏頂相を『一字奇特仏頂経』・『一字仏頂輪王経』

『陀羅尼集經』所収の仏頂系経軌の考察 (佐々木)

等では三十二相中最勝としており、⁽³⁾このような心理を背景として仏頂は特に別出・尊格化されたと考えられる。

このような仏頂尊を主尊とする経軌の初出は、保定四年(五六四年)翻訳とされる『仏頂呪経并功能』と目されるが、⁽⁴⁾その後七・八世紀を中心に盛んに翻訳されており、初期密教の最後を飾るものとして種類・紙数ともに莫大なものとなっている。

仏頂尊に関する本格的な研究としては、まず三崎良周先生の「仏頂系の密教」の名が挙げられなければならないが、その中では仏頂系の経軌を五十三種と数え、その上で三種の系統分類を試みている。⁽⁵⁾

(a) 仏頂輪王・一字頂輪王・金輪仏頂を中心とする経軌 『陀羅尼集經』・「一字仏頂輪王經」等

(b) 尊勝仏頂を中心とする経軌 『仏頂尊勝陀羅尼經』・「三種悉地破地獄儀軌」等

(c) 白傘蓋仏頂を中心とする経軌 『白傘蓋陀羅尼』・「首楞嚴經」・「大仏頂別行法」等

この中でも(a)系統に属する経軌としては、菩提流志・不空等訳の大部なものが多いが、この系統の初出こそが永徽四年(六五四年)翻訳の『陀羅尼集經』卷一なのである。この『陀羅尼集經』の卷一「金剛地印法」および卷十二「都会壇法」では、仏頂(特に帝殊羅施)をもって諸尊を統べるものとして位置付けており如何に重要視していたかが伺われる。

しかし私見に依る限り、この(a)系統に属する仏頂系経軌はいずれも対応する梵本および西蔵訳は無く、この『陀羅尼集經』所収経軌もまたその例に漏れるものではない。⁽⁶⁾従来の『陀羅尼集經』の解説書では、この卷一「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」の異訳は紹介されていなかったが、『大仏頂別行法』の本文二箇所との対応が見られた。

三、失訳『大仏頂如来放光悉怛多般怛羅大神力都撰一切呪王陀羅尼經』 —大威徳最勝金輪三昧呪品第一（大仏頂別行法）— について

『大仏頂別行法』について、『大正新脩大藏經（*以下『大正藏』と略す）』では、延久三年（一〇七一年）の東寺三密藏写本であること、および□□三年十二月に誤りが多いことから他本をもって校訂したことが記されている。しかし中国・日本の諸目録には記載が無く、また訳者の名も無く同経の経歴を辿ることはできない。⁽⁷⁾ 唯一、長部和雄先生がこの『大仏頂別行法』について、同経の「一切智者」の文言より純密伝来時代の成立との見解を示しているが、⁽⁸⁾ 同じ文言が『陀羅尼集經』の対応箇所にも含まれていることからその説は否定されてしまう。そこで様々な仏頂経軌を渉覧した結果、『大仏頂別行法』の関連典籍として『大仏頂広聚陀羅尼經』を、そして異訳經典として『首楞嚴經』の二本を見つけることができた。

まず『大仏頂広聚陀羅尼經』について述べれば、『大正藏』所収本は安元二年（一一七六年）に書写された石山寺蔵のものであるが、この経もまた経歴・訳者ともに不詳である。この『大仏頂広聚陀羅尼經』は全五巻でその内の第三巻が欠落しているが、第四巻冒頭ではその第三巻に関して以下のように述べている。

第三無畏宝広聚如来仏頂秘密藏。亦名七族王。亦名大仏頂一切如来光明聚悉怛多鉢怛羅大神力撰一切呪王陀羅尼經。大威徳最勝金輪三昧呪品第十二白傘蓋仏頂之經一卷。有如是我聞後有受奉行。為時間之有不及写也。⁽⁹⁾

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察 (佐々木)

いつ誰の手によって書き加えられた記事であるのか判然としないが、ここでは『大仏頂別行法』が『大仏頂広聚陀羅尼經』の第三卷に配当されることが述べられている。しかしこの伝に関しては内容的・構造的に検討してみてもいくつかの疑念を感じざるをえない。

〔疑問一〕『大仏頂別行法』と『大仏頂広聚陀羅尼經』との品数が計算上合わない⁽¹⁰⁾

〔疑問二〕『大仏頂別行法』と『大仏頂広聚陀羅尼經』とでは品の冠名が異なっている⁽¹¹⁾

〔疑問三〕『大仏頂別行法』と『大仏頂広聚陀羅尼經』とでは品分別の基準が異なっている⁽¹²⁾

〔疑問四〕『大仏頂別行法』と『大仏頂広聚陀羅尼經』とでは文体的にも内容的にも異なっている⁽¹³⁾

〔疑問五〕『大仏頂別行法』と『大仏頂広聚陀羅尼經』とでは示される仏頂尊の種類が異なっている⁽¹⁴⁾

これらの疑義より筆者は『大仏頂広聚陀羅尼經』の記を誤った伝承に基づくものと結論付けるのであるが、少なくとも石山寺において『大仏頂別行法』の存在が知られていたことがわかる⁽¹⁵⁾。次に『大仏頂別行法』の異訳と目される『首楞嚴經』について触れたいと思う。

四、般刺蜜帝訳『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經(首楞嚴經)』について

この『首楞嚴經』全十巻は、七三〇年に智昇が編纂した『開元釈教録』等に記載されて以来、日本・中国の様々な目録中にその名を見ることができ、一般的に神龍元年(七〇五年)に中天竺沙門の般刺蜜帝によって翻訳されたとされるが、目録によっては南棲山沙門の懷迪による翻訳を支持するものも見受けられる。また『首楞嚴經』は内容的に密教・禪・道教等の要素が入り混じった雑駁な文意であり、翻訳者問題と併せ

て古来よりその成立が疑がわれてきた。当経の成立に関する先学の考究を並記すると以下の通りとなる。

〔望月信亨先生〕「大仏頂首楞嚴経真偽問題」(一九二三年)・『望月仏教大辞典』(一九三六年)・

『仏教経典成立史論』⁽¹⁸⁾(一九四六年)

↓翻訳者の問題について、七三〇年の目録編纂時に般刺蜜帝訳・懷廸訳とする二種の『首楞嚴経』があったと推測。その上でこれらの翻訳の伝承には疑問が多いとし、また理義幽玄なる本文は到底梵本に由来したものとは考えられないとして、懷廸の徒による中国撰述・偽作経典と断じている。また当経中には「金剛大道場経から略出した」という記事が存するが、これは先行する『陀羅尼集経』等の記事を真似たものとし、様々なことを鑑みてその製作年代を久視元年(七〇〇年)から唐開元十八年(七三〇年)の間としている。卷七中の大仏頂陀羅尼については難陀所集の明呪を伝えたものとし、また同巻前半の儀軌については参酌した『一字仏頂輪王経』・『陀羅尼集経』の説に梵僧の口説を併せたものと推定している。

〔大村西崖先生〕『密教発達志』⁽¹⁹⁾(一九一八年)

↓『首楞嚴経』を中国撰述とする望月説を支持。しかし一方では第七巻中の大仏頂陀羅尼のみを仏説、その他の本文を偽経とする『唯識同学抄』を引き、『陀羅尼集経』原本「金剛大道場経」の部分抄出こそがこの陀羅尼であるとの推測を述べている。また同七巻中に説かれる儀礼についても「是蓋那爛陀密教灌頂中。仏頂部新式歟。」と記すように密教経典として高い評価を付している。

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察（佐々木）

〔神林隆浄先生〕『仏書解説大辞典』第七卷（一九三三年）

↓『首楞嚴經』の成立について禪家の要文に親部密教思想、つまり第七卷に大仏頂陀羅尼が加味されたものと断定。また密教的な記事については雑部密教に属するものとしながらも、やや純密教になりかかっていると述べている。

〔常盤大定先生〕『大仏頂首楞嚴經』に関する研究⁽²⁰⁾（一九四一年）

↓様々な資料を検証した上で、無名の梵僧が懷廸と共に翻訳したとする『開元録』の記事を一番信用できるものとし、『首楞嚴經』全体に対応する梵本は無かったと結している。この無名の梵僧が将来した梵本は、卷七の大仏頂陀羅尼とこれに関する多少の因縁などではなかったかと推定、その上で經典の大部分は中国において懷廸によって書き下ろされたものとの見解を示している。

〔三崎良周先生〕「仏頂系の密教―唐代密教史の一視点―」⁽²¹⁾（一九七七年）

↓特に『首楞嚴經』卷七の成立について、元来は梵字の陀羅尼だけであったもの、この陀羅尼に関する説述が追加され、更に他卷に説かれるような陀羅尼に関係しない様々な説話が添加されたものとしている。

〔長部和雄先生〕「般刺蜜帝訳大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經の成立過程に関する小考」⁽²²⁾（一九八四年）

↓密教的要素を度外視して『首楞嚴經』全卷を中国撰述として扱った望月説、そして禪門の視点から当

経の成立を考察した神林説を批判。それに対して大仏頂陀羅尼こそをインド起源と見た大村説こそを高く評価している（常磐大定先生の研究には触れず）。その上で第七巻中の大仏頂陀羅尼が他巻に説かれないこと、および全巻を通して内容に脈絡がないことから全十巻の段階成立を提唱。その順序は巻七が神龍元年（七〇五年）に成立、同年内に同調の巻八・九・六が順に追加、そして密教色の薄い巻三・四・五、続いて密教色のない巻二が漸次に追加され、最後に『摩登伽経』から取材された巻一が置かれたと推測している（他巻の成立年代は確定困難とも²³）。その撰述のはじめを神龍元年（七〇五年）に位置付ける根拠は、内容の検討および史実との照合（則天武后を中心に）等から鑑みたものである。また巻七前半の儀軌部分に酷似するものとして、『大仏頂別行法』の存在を指摘している。

〔崔昌植先生〕「敦煌本『楞嚴経』の校正について」²⁴（二〇〇二年）

↓『首楞嚴経』の最古原形資料と目される敦煌本には一貫して訳者についての記事が無いという。このことに注目し中国の諸録に記載される般刺蜜帝訳あるいは懷迪訳とする伝訳説はいずれも虚構の捏造であると断じている。

これらの諸先生の研究を概観すると、『首楞嚴経』全体に対応する梵本の存在に対して否定的であり、その多くの本文を中国撰述と見ている。しかし『首楞嚴経』巻七中の大仏頂陀羅尼に関しては、各々先生によって含みは異なりつつも、そのインド起源を了承している。神林隆浄先生は禅門の要文に密教的要素が添加されたものとしているが、『大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経』という正題からしてやはり密教的記事こそが当経の根幹であったであろう。つまり長部和雄先生の段階成立説にのっとるならば、この大仏頂陀

羅尼が最初期から本経中に存していたことは間違いないと思われる。

『大仏頂別行法』の異訳として今取り上げるのは、この大仏頂陀羅尼の直前に説かれた儀礼等の記事である。そこでは道場(壇)を造ることに先駆けて比丘の淨禁戒を持つること、壇の造立・莊嚴方法と修道方法、そして仏頂より十恒河沙の金剛密跡が示現されたことが記されているが、この箇所がインドに由来するものであるのかを以下、問題にしたい。⁽²⁵⁾

望月信亨先生はこの儀礼本文、特に壇の造立・莊嚴に関して、菩提流志訳『一字仏頂輪王経』、阿地瞿多訳『陀羅尼集経』等の所説を合わせて作成したものとしている。しかし『一字仏頂輪王経』と『陀羅尼集経』を検証する限り、部分的に類似するものはあっても、この『首楞嚴経』の儀礼を構成しうるだけの素材を両本に見出せない。一方の大村西崖先生は『首楞嚴経』の儀礼について、ナーランダの灌頂に関わる仏頂部の新式である可能性を指摘しているが、この見解には筆者大いに賛同するところである。牛糞を用いて塗土するとの記事、また七日を区切りとして壇作法を執り行っていくとする記事は、他のインド起源の密典の儀礼と一致するところである。常磐大定先生は、梵僧が将来したものを大仏頂陀羅尼のみではなく、この陀羅尼に附随する多少の因縁ではなかったかと推定するが、この見解はまさしく筆者の意の尽くせるところである。そしてこの陀羅尼直前の儀礼に関する記事が、三つに分断される形で『大仏頂別行法』本文と対応してくるのである。⁽²⁶⁾

五、『陀羅尼集経』卷一と『大仏頂別行法』・『首楞嚴経』の異訳対照

以上の検討を踏まえて、『陀羅尼集経』卷一「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」・『大仏頂別行法』・

No. 901 阿地瞿多『陀羅尼集經』卷一

No. 947 失訳『大仏頂別行法』

No. 945 般刺蜜帝『首楞嚴經』

<p>六師外道（富蘭那）と釈迦仏頂の神通比べ T18p785b09 ~ 785c15</p>	A	<p>六師外道（富蘭那）と釈迦仏頂の神通比べ T19p180a09 ~ 180b25</p>	
<p>仏頂法 仏頂三昧陀羅尼法 香雲供養之法 金輪仏頂像</p> <p>以上を中心として 印呪一から印呪十三までを説示 T18p785c15 ~ 790b06</p>		<p>阿難による 仏への讃嘆と設問 T19p180b25 ~ 180c04</p>	
		<p>如来摂心の事（律儀・十二因縁・懺悔等） T19p180c04 ~ 180c25</p>	C-1
		<p>二十四句の偈頌による設問 T19p180c25 ~ 181a09</p>	
<p>諸神・観世音・帝殊羅施・金輪の神呪比べ T18p790b06 ~ 790c17</p>	B	<p>諸神・観世音・悉怛他般多羅の神呪比べ T19p181b23 ~ 181c17</p>	
		<p>仏頂より無量の金剛密跡の示現 T19p790b06 ~ 790c17</p>	C-2
		<p>一切諸仏・菩薩等に対する帰敬偈 T19p182a26 ~ 182b02</p>	
<p>仏頂八肘壇法 金剛地印法 七日作法</p> <p>以上を中心として 印呪十五から印呪三十二までを説示 T18p790c17 ~ 795a17</p> <p>* 以上で巻一を終る</p>		<p>仏菩薩・金剛・天等の印・陀羅尼の説示 T19p182b3 ~ 188c20</p>	C-3
		<p>仏頂より十恒河沙の金剛密跡の示現 T19p133c13 ~ 133c25</p> <p>439句よりなる大仏頂陀羅尼の宣説 T19p133c25 ~ 136c15</p> <p>* 以下巻七が終る迄、種々に説かれる T19p136c16 ~ 141b13</p>	

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察 (佐々木)

『首楞嚴經』の本文対応関係を実際に提示したいと思う。

この表を見ればわかるように『大仏頂別行法』の本文は、『陀羅尼集經』卷一經說部分と『首楞嚴經』儀禮部分の記事を混交させた形で構成されている。三本で五箇所に対応が見られるが、本稿の主題は『陀羅尼集經』の考察であり、とりあえず『大仏頂別行法』と『首楞嚴經』の異訳対応(C・1-3)に関してはこれ以上触れないこととする。それでは以下、經說A・Bの箇所について実際の本文を掲げたいと思う。

《經說Aの箇所の本文》

『陀羅尼集經』卷一

如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。

與大阿羅漢五千人俱。摩訶迦葉。優嚧毘羅迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。難陀阿尼嚩駄。阿若陳如。阿難陀。羅睺羅等而爲上首
復有無量大菩薩衆。普賢菩薩。曼殊室利菩薩。觀自在菩薩。虚空藏菩薩。彌勒菩薩。金剛藏菩薩。而爲上首。

『大仏頂別行法』

如是我聞。一時佛在舍衛國祇樹給孤獨園。

與大阿羅漢五千人俱。摩訶迦葉。優樓頻螺迦葉。伽耶迦葉。那提迦葉。舍利弗。大目犍連。難陀。阿瑠楼駄。劫賓那。阿若陳如。阿難。羅睺羅等而爲上首。
復有無量大菩薩摩訶薩衆。普賢菩薩。文殊師利菩薩。觀世音菩薩。虚空藏菩薩。彌勒菩薩。金剛藏菩薩。而爲上首。
復有無量呪神。王毘俱知神。何耶吉利婆神。而爲上首。

苾芻苾芻尼。優婆塞優婆夷。天龍藥叉迦嚕囉健達婆
阿素羅緊那羅摩落伽等。復有無量諸大國王。輸頭檀
王。波斯匿王。頻婆娑羅王。梨車毘等而爲上首。

爾時六師外道謂。第一富蘭那迦葉。第二摩斯迦利拏
瞿舍梨子。第三散社伊倍羅胝子。第四阿質多鷄賒迦
婆羅。第五迦俱多伽智那耶那。第六尼乾陀若提子等。
來詣佛所。欲與世尊共相論議。

時彼園中有一枯樹。名菴末羅。

爾時富蘭那迦葉。問世尊言。「爾瞿曇非一切智。若

復有無量金剛。跋闍羅妊訶娑金剛。而爲上首。

復有日天子。復有無量藥叉王。阿妊薄俱而爲上首。

復有日天子。月天子。四大天王。忉利天王。釋提桓

因。大自在天。□大梵天。兜率天。首陀會天。摩醯

首羅天。功德天。毘首羯摩天。并及眷屬。天龍。鬼

神。阿修羅。迦樓羅。乾闥婆。緊那羅。摩睺羅伽。

鳩槃荼。布單那等。

復有無量人天王。龍王。羅刹王等。比丘。比丘尼。

優婆塞。優婆夷等。無量恒河沙俱知那庾多聲聞。菩

薩。人天大衆。龍神八部。前後圍遶。供養恭敬。尊

重讚嘆。以諸花香。而散佛上。各各歡喜。合掌頂禮。

遶佛三匝。却坐一面。瞻仰如來。目不暫捨。欲願

聞最勝之法。

爾時王舍城中。六師外道常行邪見。第一富蘭那迦葉。

第二摩訶斯迦利拏瞿舍利子。第三散社伊羅胝子。第

四阿質多鷄賒迦婆羅。第五迦俱多伽智耶那。第六尼

乾撻陀若提子。如是等六大外道。將其眷屬。來詣佛

所。欲與如來共相論議。

時彼園中有一枯樹。名菴末羅。

爾時富蘭那迦葉問佛言。「瞿曇禰非一切智。若具一切

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察（佐々木）

一切智。此菴末羅樹。定死以不」。時佛知而默然不答。

時富蘭那迦葉。手把白拂以水散之。拋於枯樹使樹還生。枝葉華果悉令繁茂。時彼外道。手摘果子以行時衆。

爾時會中多有凡衆。心各狐疑。凡夫外道有此神異。佛定不勝。

時佛世尊知會衆心。即入火光三摩地。從於頂上放無量光。照三千大千世界已。佛以自手作佛頂印。誦佛頂呪。於佛光中。化作無量阿僧祇梵伽沙那由他佛。其一一佛。於虛空中行住坐臥。各放無量光明。身出水火。現作種種佛威神事。爾時彼樹如故枯乾。彼富蘭那。即時倒地悶絕而臥。其諸弟子互相啼哭。爾時諸天住在空中。散華供養種種音樂。及四部衆皆大歡喜退坐一面。

智者。云何此菴末羅樹定實死耶。得活耶」。時佛世尊默然不答。

爾時富蘭那迦葉見佛不答。手執白拂。以水啣樹還生花葉。扶疏花盛。須臾之間便結果熟。其富蘭那迦葉令諸弟子摘果。將與大衆。

爾時會中。一切凡夫心生疑惑。歎此外道有大異怪。佛不答默然。而實爲如來無一切智。不及外道。

爾時世尊。知其會衆心生狐疑。即入火光三昧。從於頂上放大光明。照於三千大千世界已。佛自作佛頂印。召請十方諸佛菩薩。於虛空中。無量恒河沙諸佛菩薩普皆雲集。其十方諸佛亦放光明。身出水火。現大威力。令彼枯樹。還即熟境。摧折凋落。周其外道等煩惱悶亂。互相執手。悲啼號哭。四散奔走。爾時諸天住在空中。散花供養。種種音樂。而讚歎佛神力。具一切智。降伏外道。四衆歡喜。皆發阿耨多羅三藐三菩提心。

〔経説Aの箇所的大意〕

仏が舎衛城祇樹給孤独園において集会している時に六師外道が来詣する。そこで六師外道の一人の富蘭那 (Purāṇa-kassapa) は論議と称して瞿曇 (Gotama) を一切智者ではないとなじり、「もし一切智を具えるならば菴摩羅 (amra マンゴー) の枯れ木を枯らしたり活かしたりしてみろ」と問いかける。しかしそれに対する仏世尊の解答はなく沈黙していた。そこで富蘭那は白拂を執り水をばらまき樹を生き返らせたのである。それを見た凡夫たちは、「仏は外道に及ばないのではないか」といった疑念をつのらせる。そのような衆生の心を感じとった仏世尊はすぐに火光三昧に入って、その頂より大光明を放って三千大千世界を照らし、後に自ら仏頂印 (呪) を作ってその光明の中に無量無数の仏を化作した。その無量無数の仏は各々にまた光明を放ち、身体より水・火を出して、様々な威神の事を現わして、マンゴーの樹を再び枯れさせてしまう。仏の威神力を見て富蘭那等の外道は地に倒れ悶絶し、その弟子達は啼哭し逃げ出してしまふのである。

ここに登場する六師外道とは一般的に釈尊と同時代に活躍した代表的な思想家あるいは宗教家を指し、諸仏典中では釈尊に対立するものとして描かれてきた。ここでもその六師が共に来て釈尊と対峙したことが述べられるが、宇井伯寿先生の研究に従えば史実に基づいた記事とは考えられない。²⁷⁾ また一般的に富蘭那、つまりプーラナ・カッサパは非道徳論者として位置付けられる者であって、神通を得意としたとする記事は見当たらない。おそらくこの記事は仏教圏内で呪術が定着しつつあった時代に、従来の対立構造を転用しながら、呪術的要素を仏教的に位置付けようとして製作されたものであろう。後に載する経説Bもまた同様の意図のもと製作されたものであろう。

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察 (佐々木)

〔經説Aに関する両本の相違点〕

両本で相当の単語の出入が見られ、特に『大仏頂別行法』では対告衆等の増広が認められる。しかし両本の内容はおおむね一致したものと見えよう。

この箇所では筆者が強調したいことは、この經説の後の展開が両本において全く異なっていることである。經説の流れを意識するならば、以下の展開は六師外道の降伏法が説かれるのが妥当と思われるが両本ともにそのようではない。『陀羅尼集經』では直後に「仏頂法」と称される十五日間にわたる壇法が説かれ、以下經説Bに到るまで種々の仏頂系印呪および壇法が示される。一方の『大仏頂別行法』では、その直後に阿難と仏世尊による問答が繰り広げられるが、如何に降伏したかとの設問に、仏は四摂事や十二因縁法をもって答えるのみである。經説中では、外道を降伏するために仏は火光三昧に入り仏頂印あるいは仏頂呪を伴って修法したとしか書いておらず、両本ともに話の展開に少し無理があるように思われる。經説Bの箇所もまた前後の展開が両本において異なり、また話の流れに脈絡の無さが見受けられる。

《經説Bの箇所の本文》

『陀羅尼集經』卷一

爾時會中。復有無量諸大菩薩。四道果人。及諸緣覺。
并諸天衆一切鬼神諸仙外道。皆悉雲集。各獻神呪皆

『大仏頂別行法』

爾時十方諸佛。各各令菩薩獻大神呪。一切金剛示現
神變。説呪奉上。乃至天龍。鬼神。藥叉。大將。諸

言。我曾過去諸佛所說神呪。我皆受持。或言我從十恒河沙佛。所說呪我皆受持。或言二十或言三十乃至或言。百恒河沙佛所說呪。我皆受持。是諸衆等各白佛言。世尊我等今欲各誦神呪。惟願世尊聽我等說。爾時世尊默然聽許。時諸菩薩諸天鬼神。諸龍王等。隨其所應。各誦先世所習神呪。其所誦呪。各現呪神。側塞虛空中無間隙。

爾時觀世音菩薩。起大慈悲。偏袒右肩頂禮佛足。白佛言世尊。我曾過去於諸佛所得陀羅尼。我今欲說。願佛聽許。

爾時世尊讚歎觀世音菩薩。善哉善哉。汝大慈悲欲說神呪。今正是時爾時觀世音菩薩。即現何耶揭哩婆身唐云馬頭。說神呪時。即現呪神映蔽於前。一切菩薩諸天神等所現呪神。悉令不現。如以磴石蓋於井上。唯觀世音菩薩一切持呪。衆聖中王獨顯自在。

爾時世尊起大慈悲。即於頂上肉髻相中。放五色光。遍照十方一切世界。於虛空中遊旋如蓋。其光明中有菩薩。名帝殊囉施。結加趺坐放大光明。身支節中各出火焰。口說神呪。多者名

仙人等。皆現神變。說呪奉上。皆言。我呪有大威力。能伏毒惡。如是等衆。無量無邊無數悉皆雲集。咸作是言。世尊。我今欲說如是神呪。唯願聽許。

爾時世尊。默然納受。時諸菩薩。天龍鬼神。五通神仙。各於佛前。演說先世所得神呪因緣。其說呪時。各現本呪神形。遍塞虛空中。無有空缺。

爾時觀世音菩薩。還從會中。安祥而起。偏袒右肩。頂禮佛足。而白世尊。我曾過去世中。於諸佛所。得陀羅尼。我今欲說。願聽許。

爾時佛告觀世音菩薩言。善哉善哉。汝大慈悲欲說神呪。今正是時。爾時觀世音菩薩。即現馬頭羅刹身。說大神呪。名何耶揭哩婆。放大光明。映蔽一切諸來呪神。皆當降伏。唯顯一身。迥然獨立。

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察 (佐々木)

曰大佛頂呪。少者名爲小佛頂呪。說如是等種種呪法。并作印法。帝殊囉施說此呪等。現威神時。映蔽於前何耶揭哩婆身。及呪神悉不復現爾時觀世音菩薩。頂禮佛足白佛言世尊。奇哉希有。世尊威神。我於一切持呪中王。更無有上。世尊慈悲頂上放光。光明中出帝殊囉施菩薩。滅我所現身及呪神。一無遺餘。更有何法。能滅世尊帝殊囉施。

爾時世尊告觀世音菩薩。我有心呪名曰金輪。最尊爲極更無過者。惟佛與佛乃能知之。是呪能滅帝殊囉施并呪等法。汝等應當一心受持生希有想。

爾時世尊。即說金輪陀囉尼印。印如前所說誦者聽者若能至心。隨誦一遍一經於耳。塵沙衆罪若輕若重悉皆消滅。無願不果速當成佛。此陀囉尼悉能破壞一切諸法。更無有上。此結印呪有人安在此中本無。

爾時佛告觀世音菩薩言。我有佛神呪。名曰佛頂如來放光摩訶悉怛他般多羅攝一切呪王最勝金輪帝殊囉金剛大道場陀囉尼。極大尊重。爲利益一切衆生。更無有上。唯佛與佛共相傳說。汝等應當一心受持。生希有想。

〔経説Bの箇所的大意〕

仏の面前に大乘菩薩・小乗徒・天衆・鬼神・仙・外道が雲集していて、会衆各々が自分に過去諸仏所説の神呪があることを仏に申し出て許可を求めた。それに対して仏は許可を与え、各々の会衆は神呪をこぞって誦し、虚空に隙間がなくなるほど呪神を出現させたという。その時、観世音菩薩は仏前に出でて何耶掲梨婆（馬頭）の身を現わして一瞬にして全ての呪神を消し去ったのである。そして観世音菩薩は周りの会衆に称讃されることとなる。

その時、世尊は頂上の肉髻より、十方一切世界を照らし出す五色光を出して帝殊羅施菩薩を示顕させた。出現した帝殊羅施は光明・火焰を放ち、仏頂呪・呪法を修しまた印法をなして何耶掲梨婆身と呪神を消し去った。観世音菩薩はこの世尊の威神を称讃して、更に帝殊羅施を超えるものを問うのである。

それに対して世尊は、最尊にして唯だ仏と仏のみが知る金輪神呪の存在を明かし受持を勧めた。最後に世尊は金輪陀羅尼印の功德として、一切衆罪の消滅・速な成仏・一切諸法の破壊という機能を提示するのである。

〔経説Bの箇所に関する相違点〕

相当な単語の出入が認められるが、それ以上に馬頭が登場してからのエピソードが両本では全く異なっている（*本文中の点描囲み部分を参照）。続く場面において『陀羅尼集経』巻一では帝殊羅施による馬頭・呪

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察（佐々木）

神の調伏記事を載せるが、『大仏頂別行法』ではこの記述を完全に欠してしまっている。続く觀世音による世尊の讚嘆および設問もまた『陀羅尼集經』のみの記事となっている。

これ以後の展開は両本共に類するところであるが仏所持の神呪名のみが異なっている。『陀羅尼集經』においてはその神呪を「金輪」と称するのに対して、『大仏頂別行法』では「仏頂如来放光摩訶悉怛多般多羅撰一切呪王最勝金輪帝殊羅施金剛大道場陀羅尼」という非常に長くそして様々な要素を盛り込んだような名を提示している。

このように両本には決定的な相違が存するのであるが、これは『大仏頂別行法』の方にこそ問題があると思われる。⁽²⁸⁾ 白傘蓋の經軌という制約上、⁽²⁹⁾ 帝殊羅施の記述を割愛せざるを得なかったと思われる、名残りとして陀羅尼名中に帝殊羅施・金輪という名が留められたのだろう。

また『陀羅尼集經』の点描囲い部分には、

多者名曰大仏頂呪。少者為小仏頂呪。說如是等種種呪法。并作印法。

という文章が掲げられるが、これは『陀羅尼集經』の編集の際に付け加えられた一文のように思われる。前回論稿において詳しく論じたが、『陀羅尼集經』には壇法・印法を「仏説」のもとに權威付ける傾向が色濃い。⁽³⁰⁾ またこの一文に連動して、『陀羅尼集經』の經説Bの終わりには、

爾の時世尊、即ち金輪陀羅尼印を説く。印は前の所説の如し。誦者、聽者、若し能く至心に一遍誦するに随がつて一たび耳を経れば、塵沙の衆罪、若しは輕、若しは重、悉く皆消滅す。願果たさざること無

く、速やかに当に成仏すべし。此の陀羅尼は悉く能く一切の諸法を破す。更に上有ること無し。

とあるが文意は非常に説明的なものであり、これもまた經典編集の際に付け加えられた文言であろう。

《経説A・Bの箇所総説》

次に経説AとBの関連性の有無について私見を述べたい。まずその内容について触れると経説Aでは帝殊羅施の外道に勝れることが説かれ、一方の経説Bでは帝殊羅施に勝る威徳者として金輪の名が挙げられている。

特に経説Bに依れば千葉照観先生のように、『陀羅尼集経』は帝殊羅施よりも金輪こそを高く見ていたとの結論に傾く⁽³¹⁾。しかし『陀羅尼集経』全体を検証してみると、むしろ逆であって帝殊羅施こそが諸尊を統べるものとして位置付けられているのである⁽³²⁾。これは明らかな矛盾である。

この矛盾は『陀羅尼集経』を一本よりの純粋な翻訳と考えるから生じるのであって、元来全く別々であった経説AとBを『陀羅尼集経』の編訳時に取り込んだと考えれば解消されるのである。現にこれら二つの経説は仏頂呪の最勝性を説く点でしか共通性を見出せない。そして『大仏頂別行法』におけるこの二経説の配置もこの推測を裏付けるように思われる⁽³³⁾。また今回取り上げることが出来なかったが、これら二つの経説と儀軌部分の関係についても積極的な連関を見出すことができない。

おそらく『陀羅尼集経』の訳者とされる阿地瞿多は、共通して仏頂を説く二種の粉本を選択し、それに仏頂系の印呪等の儀軌的要素を加えて『陀羅尼集経』巻一「大神力陀羅尼経釈迦仏頂三昧陀羅尼品」を編纂し

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察 (佐々木)

たものと筆者は睨んでいる。そして同様の傾向を見せる『大仏頂別行法』・『首楞嚴經』もまた各々に中国において編集された經典であろう。これらの經典には時に中国的記事の混入を見るが、經説・神呪・儀軌等の記事の中には、基となったサンスクリット粉本の存在を予測させるものも少なくない。

最後にこの『陀羅尼集經』・『大仏頂別行法』・『首楞嚴經』に共通する伝承について触れたいと思う。それは中国撰述が疑われてきたものも含めて、等しく『金剛大道場經』と深い関連を見せるのである。⁽³⁴⁾これら三本以外では耶舎崛多訳『仏説十一面觀世音神呪經』の中にもこの名称も見出せるが、これもまた『陀羅尼集經』卷四の異訳に当たり何らかの繋がりを感じざるをえない。⁽³⁵⁾この『金剛大道場經』は未だその現存を見ないもので、インドナールンダに由来すること、また十万偈より成り立っていることが伝承されているのみである。

〔大村西崖先生〕『密教發達志』⁽³⁶⁾ (一九一八年)

↓『金剛大道場經』は魏く周(三C半)に述作されたものと、また『陀羅尼集經』原本であった『金剛大道場經』年をて増広され『首楞嚴經』大仏頂陀羅尼の粉本になったと推定している。

〔望月信亨先生〕『大仏頂首楞嚴經真偽問題』⁽³⁷⁾ (一九二二年)・『仏教經典成立史論』⁽³⁸⁾ (一九四六年)

↓『金剛大道場經』を義浄『大唐西域記』が伝えるナールンダの持明呪藏十万頌であったと指摘している。また『首楞嚴經』に載せられる『金剛大道場經』の伝承は『陀羅尼集經』の発想を借りたものとし批判している。

〔神林隆浄先生〕『仏書解説大辞典』⁽³⁹⁾第七卷（一九三三年）

↓『首楞嚴経』に載せられる『金剛大道場経』の伝承について、ナールランダの持明呪蔵十万頌の存在を明かす義浄『大唐西域記』の記事に基づいたものとしている。

〔長部和雄先生〕

〔般刺蜜帝訳大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴経の成立過程に関する小考』⁽⁴⁰⁾（一九八四年）
↓大村西崖説を全面的に支持。

〔頼富本宏先生〕「仏教パンテオンの構成」⁽⁴¹⁾（一九八八年）

↓『金剛大道場経』を經典成立時に見られる一種の神話と推定している。

この中でも私は望月信亨先生の説に興味を持っている。中インド、ナールランダで製作されたあるいは蒐集された様々な経説・陀羅尼の粉本の集積を、インドあるいは中国において『金剛大道場経』と呼んだのではなからうか。そしてこれらの粉本を取り入れて成立した經典こそ『金剛大道場経』の名が付言されたのではないか。

これらは全く根拠の無い提言であるが、『大仏頂別行法』を中心に三經典が異訳関係であること、およびこれら三經典に共通する伝承が載せられること、これらの奇妙な連関が筆者をして『金剛大道場経』を単なる虚構の伝承と感ぜさせないのである。

六、結 語

本論稿の冒頭で述べたように筆者は『陀羅尼集經』卷四および卷十の考証を通じて、『陀羅尼集經』の特質として三つの傾向を設定した。梵・西藏の異訳が無かったために断定は難しいが、今回『陀羅尼集經』卷一「大神力陀羅尼經釈迦仏頂三昧陀羅尼品」の異訳対照を通じて二番目の「主要術語における一貫した改変（強調点の移行）」の傾向を見い出すことができた。また三番目の特質「儀軌・実践部分の増広」については作業の進展上触れることができなかったが、すでにある程度の目星は立っている。

何より今回の検討を通じての最大の収穫は、『陀羅尼集經』の編集性をより鮮明にできたことである。前論稿までは経説と儀軌の編集とのみ考えていたが、経説部分においても更に細かく分けうることが判明した。まさに『陀羅尼集經』の本文はパズルのように様々な経説・呪文・儀軌が組み合わされているのである。

また『陀羅尼集經』・『大仏頂別行法』・『首楞嚴經』の対照を通じて驚いたことは、同一の経説を用いながらも構成の如何によって全く別仕立ての経典になっていることであった。またそれは時に本文の改変を伴ったものであり全くその様相・印象を変えてしまう箇所もあった。このような分析が多く、多くの経典に汎用されるかどうかは未知数であるが、経典を読み解く際に注意しなければならぬ傾向といえよう。この『陀羅尼集經』の考察は、梵本が如何様に中国に受用され漢訳されたかの問題へと波及しつつある。——これらの経典の作者はどのような状況下で、どのような心持ちで経典製作に臨んだのであろうか——、経文の背後に隠された真実に筆者の興味は尽きない。

- (1) 『宗教研究』第二七六号所収、頼富本宏「仏教パンテオンの構成」一一四頁
- (2) 『智山学報』第52輯所収、拙稿「『陀羅尼集経』の研究―特に卷四「十一面観音経」と、卷十「功德天法」の異訳対照を中心として―」
- (3) 『大正蔵』第19卷二八九頁c段（『一字奇特仏頂経』）
 「此如来仏頂不思議如是仏三十二相中仏頂為最勝」
 『大正蔵』第19卷二四六頁b段（『一字仏頂輪王経』）
 「如於如来三十二大人相頂相為最」
- (4) 『大正蔵』第55卷二七一頁c段（六六四年、道宣編纂『大唐内典録』）
 「仏頂呪経并功能（保定四年訳学士鮑永筆受）」
 『大正蔵』第55卷二九六頁c段（六九五年、明○編纂『大周刊定衆経目録』）
 「仏頂呪経并功能一卷 右周武帝宝（*「保」の間違いか）定四年闍那耶舍等長安旧城四天王寺訳出。長房録」
 これらの記事では、北周武帝代の保定四年（五六四年）に闍那耶舍等翻訳、鮑永筆受で『仏頂呪経并功能』一卷が翻訳されたとするが現存はしない。しかし『大周刊定衆経目録』の続く記事では、この「仏頂呪経并功能」が『仏頂尊勝仏頂陀羅尼経』と同本異訳と述べられており、七三〇年、智昇編纂『開元釈教録』でもこの説が支持・継承されている。
- (5) 三崎良周著『仏頂系の密教』四八〇～四八三頁。
 仏頂系経軌の三種分類はあくまでも大別であり、今後再び検討されるべき問題と思われる。
- (6) (a) 系統の仏頂系経軌の梵本および西蔵訳について、いまだ研究書における提示を見ない。しかし (b)・(c) 系統の陀羅尼に関する梵本については、塚本啓祥・松長有慶・磯田熙文編著『梵語仏典の研究Ⅳ密教経典編』

『陀羅尼集經』所収の仏頂系経軌の考察（佐々木）

- (九七〜一〇五頁) にその所在が記載されており、金倉圓照・谷川泰教等による先行研究がすでに存している。
- (7) 『大仏頂別行法』題額下の割註には「無畏出」とあるが、これが訳者名を指すものであるかは不明である。
- (8) 長部和雄著「般刺蜜帝訳大仏頂如来密因修証了義諸菩薩万行首楞嚴經の成立過程に関する小考」一四五頁
- (9) 『大正蔵』第19卷一六五頁c段・『大仏頂広聚陀羅尼經』
- (10) 『大仏頂広聚陀羅尼經』卷二が「大仏頂無畏広聚如来仏頂造珍宝品第十一」で終り、卷四が「大仏頂無畏広聚如来仏頂召請諸仏品第十三」から始まる。これでは全六品より構成される『大仏頂別行法』と品数計算上合わない。
- (11) 『大仏頂別行法』の各品は「大仏頂如来放光悉怛多鉢怛羅……」を冠するのに対して、『大仏頂広聚陀羅尼經』各品は一貫して「大仏頂大無畏宝広聚……」を冠している。
- (12) 『大仏頂別行法』の各品は主に諸尊を中心とした分類であるのに対して、『大仏頂広聚陀羅尼經』は各品名に示されているように実践の方法・種類を中心とした弁別となっている。
- (13) 『大仏頂広聚陀羅尼經』は卷三以外では一貫したまとまりを見せるのであって、五成就文にはじまる『大仏頂別行法』の内容を挿入する意味が認められない。
- (14) 『大仏頂別行法』は白傘蓋仏頂の経軌と位置付けられるが、『大仏頂広聚陀羅尼經』では他の仏頂系経軌に類を見ない如来族・蓮華族・金剛族・宝族・像族・毘盧遮那蔵聚・宝輪の七仏頂を掲げている。
- (15) 『大仏頂別行法』は東寺三密蔵本であることを先に述べたが、『大仏頂広聚陀羅尼經』を蔵する石山寺もまた真言宗東寺派別格本山であり、十分に『大仏頂別行法』を披見しえたと思う。
- (16) 『仏教学雑誌』第三号所収論文(一〜三二頁)。
- (17) 『望月仏教大辞典』第四卷三三八七〜三三八九頁。
- (18) 『仏教經典成立史論』四九三〜五〇九頁。

- (19) 『密教發達志』三四九―三五二頁。
- (20) 『続支那仏教の研究』一―二四頁。
- (21) 『吉岡博士還暦記念道教研究論集』所収論文(四七七―四九九頁)。
- (22) 『那須政隆博士米寿記念仏教思想論集』(成田山新勝寺)一三二―一四六頁所収論文。
- (23) 長部和雄先生は段階成立説に基づいて現行の十巻本の成立を唐末以前と遅らせる。しかし七三〇年編纂の諸録にすでに「十巻」とありこの見解は否定されるべきものと思われる。
- (24) 『印度学仏教学研究』第五一卷(通巻一〇一)所収論文(三三四―三四一頁)。
- (25) この大仏頂陀羅尼より後には衆生十二類説等、直接陀羅尼に関係しないことが説かれる。これに関して望月信亨先生は道教思想が混入したところの「奇説」としており、また三崎良周先生も陀羅尼とは別の教えとして後の添加であることを述べている。これらの意見はまた領かれるものである。
- (26) 後に示す対照表をご覧いただければわかるように、大仏頂陀羅尼以前の本文は三つに分解されうる。『首楞嚴經』ではこの三つの本文が一見連携したものとなっているが、壇法と前後の経説の内容に筆者は違和感を感じざるをえない。あるいはこれらの本文が元本を異にしている可能性も考えられる。
- (27) 宇井伯寿先生『印度哲学研究』第二巻三五二頁。
- 「又中部マハーサクルダーイスッタ (Mahāsakuludāyisutta, M. N. 2, p. 1, 中阿含箭毛経・昃七・七八左) によれば六師外道は曾て摩竭陀国王舎城に於て相共に雨安居に住したことがあるとなつて居る。既にかくいわる程であるから六人ともに多くの徒衆を有し衆人に尊崇せられ大名称を有して居たと伝えられて居る。しかし六人が一時に王舎城に集つたことがあつたかどうかは明確ではない。勿論少なくとも其中の或者は数々王舎城あたりに雨安居をなしたことはあつたし、又徒衆もあり大名称のあつたことも事実であるが、果して六人凡てがそうであつたかは疑なきを得ぬ。」

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察（佐々木）

(28) この陀羅尼名および対応する陀羅尼本文、また帝殊羅施という用語を『大仏頂別行法』の他の箇所で見出せない。この陀羅尼名は經典構成上、脈絡のないものであり純粹な翻譯と考えられない。

(29) 七三〇年編纂の智昇の録には菩提流志『一字仏頂輪王經』・『五仏頂三昧陀羅尼經』、不空『菩提場所說一字頂輪王經』のような大部な仏頂系經典が収録されているが、これらでは一貫して一字頂輪王・白傘蓋頂輪王・高頂輪王・勝頂輪王・光聚頂輪王・五仏頂が説かれている。この五仏頂に照らして考えてみると、『陀羅尼集經』所説の帝殊羅施 (Tajirasa) は光聚仏頂にあたり、金輪は一字仏頂輪王に配当される。それに対して『大仏頂別行法』所説の悉怛多般怛羅 (Sitataputra) とは白傘蓋仏頂にあたり、両經は別系統の仏頂經軌と理解される。

(30) 『智山學報』第五二卷所収、拙稿「『陀羅尼集經』の研究―特に卷四「十一面觀音經」と、卷十「功德天法」の異訳対照を中心として―」一四六―一五七頁参照。しかし卷一のこの箇所に対応する異訳がないことから断定はできず、あくまでも可能性を指摘するのみである。

(31) 『印度學仏教学研究』第三七卷（通卷七四）所収論文
千葉照觀先生「仏頂尊と仏眼に関する問題―その成立を中心として―」六二六―六二七頁。

(32) 『陀羅尼集經』卷一「金剛地印法」では帝殊羅施をもつて六十四尊中の中尊としている。

「……中心帝殊羅施鑠鷄謨儻為道場主。（『大正藏』第一八卷七九四頁b段）」
ちなみに金輪は釈迦金輪仏として第二院東面第四に位置付けられている。

また『陀羅尼集經』卷十二「都會壇法（十二肘壇法）」においては九十四尊中の中尊としている。この「都會壇法」とは全十二卷をしめくくるものとして非常に重要な意味を持っていると考えられる。

「以帝殊羅施之為座主。當中心敷大蓮花座。座主即是釈迦如來頂上化仏。号仏頂仏。如其不以仏頂為主。隨意所念諸仏菩薩替位亦得。除其座主以外諸仏及菩薩等。皆在本位而受供養。自非諸仏般若及十一面等菩薩相替。」

余皆不得而作都会法壇之主余（『大正蔵』第一八卷八八八頁b段）

(33) ここで『大仏頂別行法』の経説本文が『陀羅尼集経』巻一本文を取材した可能性も勘案されなければならぬが、両本の経説A・Bの訳文・訳語を対照する限り、各々異なる元本に基づくものと筆者は考えている。

(34) 『陀羅尼集経』の翻訳序では

「此経出金剛大道場経。大明呪蔵分之少分也。（『大正蔵』第一八卷七八五頁b段）」

と『金剛大道場経』の少分の訳出であることが述べられている。またこの記事は中国の諸目録でも一貫している。

「従金剛大道場経中撮要鈔訳。集成一十二卷。（『大正蔵』第五五卷五六二頁c段／『開元釈教録』）」

「右出金剛大道場経大明呪蔵之少分也。（『大正蔵』第五五卷五九九頁a段／『開元釈教録』）」

「於慧日寺従金剛大道場経中撮要鈔訳集成一部。名陀羅尼集経。（『大正蔵』第五五卷二六八頁a段／『続古今訳経図紀』および『大正蔵』第五五卷八六三頁a段／『貞元新定釈教目録』）」

また『首楞嚴経』に関しても中インド・ナランダの『大道場経』から訳出されたものが述べられており、卷七所説の神呪名にも「金剛大道場」の名称が載せられている。

「一名中印度那蘭陀大道場経於灌頂部録出別行（『大正蔵』第一九卷一〇六頁b段等／各巻題下に）」

「大仏頂如来放光悉怛多鉢怛口羅菩薩万行品灌頂部録出一名中印度那蘭陀曼荼羅灌頂金剛大道場神呪（『大正蔵』第一九卷一三三頁c段）」

『大仏頂別行法』では『首楞嚴経』と同様に陀羅尼名の中に「金剛大道場」の名が載せられている。

「仏頂如来放光摩訶悉怛多般多羅撰一切呪王最勝金輪帝殊羅施金剛大道場陀羅尼（『大正蔵』第一九卷一八一頁c段）」

(35) 耶舎崛多訳『仏説十一面観世音神呪経』もまた『金剛大道場経』から翻訳されたことが述べられているが、

『陀羅尼集經』所収の仏頂系經軌の考察（佐々木）

その原本に十万偈があったとも付記されている。

「此經名金剛大道場神呪經。十万偈成部。略出十二面觀世音一品。（『大正藏』第二〇卷一五二頁a段）」

また前出の拙稿に詳しく述べるところであるが、この『仏説十一面觀世音神呪經』は『陀羅尼集經』卷四所収の「十一面觀世音神呪經」の異訳にあたる。

(36) 大村西崖著『密教發達志』一六三頁

「(耶舍崛多訳と阿地瞿多訳の十一面觀音經を扱っている中で)乃ち知んぬ。兩者の原本、元相同なり。其の述作、蓋し魏・周の交に在るか。」

「(『首楞嚴經』に関して触れる中で)顧みるに陀羅尼集經の原本、金剛大道場が成じて後に久しく年所を閲けみして、或は数しばしば増訂を歴て、其の一部を此の經撰述の粉本と為す。(三五〇頁)」

(37) 『仏教学雜誌』第三号一〇一―一二頁。

(38) 望月信亨著『仏教經典成立史論』五〇一―五〇二頁。

「又、此經は其の題下に一名中印度那爛陀大道場經於灌頂部録出別行と記し、又同第七に四百三十九句の大神呪を出し、その初に大仏頂如来放光悉怛多鉢怛囉万行品灌頂部録出。一名中印度那蘭陀曼荼羅灌頂神呪と題してある。これは此經并にその神呪を以て中印度那爛陀金剛大道場經中より録出別行したものだとするのであるが、恐らくそれは阿地瞿他訳の陀羅尼集經序に、此經出金剛大道場經。大明呪藏分之少分也と記してあることから、思い付いたのであろうとおもわれる。

大明呪藏とは前にも述べた如く義浄の大唐西域求法高僧伝卷下所載の田比目睥陀羅必得家 vidyāharapitaka 即ち持明呪藏を指すのであるから、随つて金剛大道場經は持明呪藏の一名と見るべきである。当時那爛陀にその呪藏の断片が存していたことは義浄の伝うる所であり、又陀羅尼集經は現に其の呪藏中より抄出したものと記載されている所から、今此經の作者はそれ等の事実に基き、此の首楞嚴經を以て亦彼の金剛大道場經中より

録出別行したものとなし、以て世人を瞞過せんと企てたものと認められるのである。」

(39) 神林隆浄先生『仏書解説大辞典』第七卷三三八九頁

「〔『陀羅尼集経』・『首楞嚴経』の『金剛大道場経』の記事について〕……義浄の大唐西域求法高僧伝巻下に、当時那蘭陀寺に持明呪蔵十万頌の断片の存したることを伝えたるに基けるものというべし。されば本経は開元以前房融等の徒によりて偽作せられたものと断すべきが如し。」

(40) 『那須政隆博士米寿記念仏教思想論集』（成田山新勝寺）一四一―一四二頁。

(41) 『宗教研究』第二七六号所収、頼富本宏「仏教パンテオンの構成」一一四頁。

「……これは経典成立にしばしば見受けられる一種の神話であり、現存の同経を見る限りでは、各種の尊格の陀羅尼を集成した経典という特色が顕著に表われている。」

【キーワード】『陀羅尼集経』、『大仏頂別行法』、『首楞嚴経』、阿地瞿多、仏頂、金剛大道場経